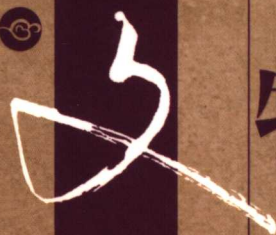


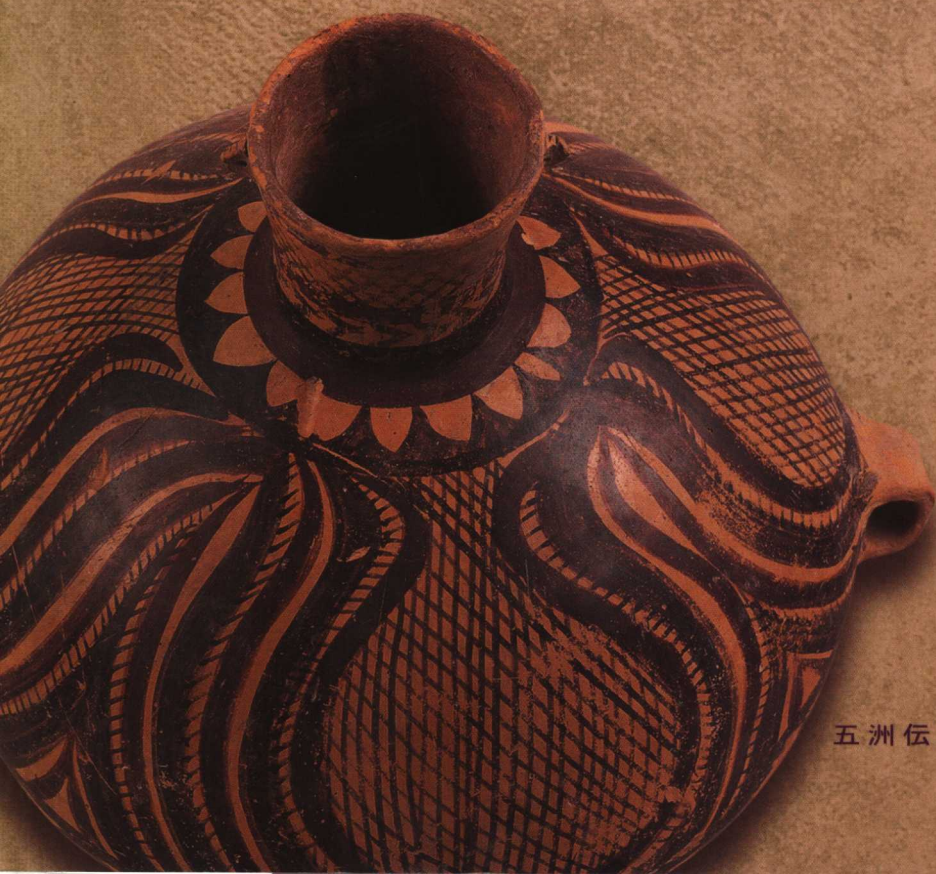
人 文 中 国 シ リ ー ズ

中国



物

李 力 著
長 安 訳



五洲伝播出版社

人 文 中 国 シ リ ー ズ

中国 人物

李 力 著
長 安 訳

SB057/02

五洲伝播出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

中国文物 / 李力著; 俞长安译. —北京: 五洲传播出版社, 2004.9

ISBN 7-5085-0459-3

I. 中… II. ①李… ②俞…

III. 文物—简介—中国—日文 IV. K87

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2004) 第 018376 号

中国文物

著 者 李 力

译 者 俞长安

责任编辑 苏 谦

特约编辑 邓丁三

编辑助理 冯凌宇

整体设计 海 洋

出版发行 五洲传播出版社 (北京北三环中路 31 号 邮编: 100088)

承 印 者 北京华联印刷有限公司

版 次 2004 年 9 月第 1 版

印 次 2004 年 9 月第 1 次印刷

开 本 720 × 965 毫米 1/16

字 数 55 千字

印 张 10.25

书 号 ISBN 7-5085-0459-3/K · 512

定 价 80.00 元

目 録

序文 1

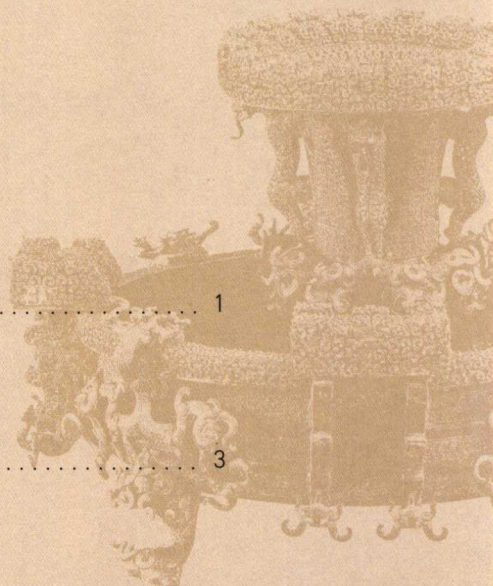
1 彩陶 3

2 美玉 15

3 青銅器 27

4 俑と塑像 43

5 陵墓の石刻 61



6 墓室の壁画	73
---------------	----

7 石窟寺と仏教の造型芸術	89
---------------------	----

8 金銀細工	105
--------------	-----

9 磁器	113
------------	-----

10 家具類	131
--------------	-----

11 漆器	143
-------------	-----

12 工芸品	149
--------------	-----

序 文

中国は世界の四大文明の発祥地の一つである。中国文明が、世界の他の三大文明：即ち、チグリス・ユーフラテス文明やエジプト文明、インド文明と異なる最大のポイントは、その延続性と不間断性にある。アジア大陸東部のこの広大な土地の上で、長江、黄河という二つの大河に育まれながら、黄色い皮ふの中国人は世々代々、同じ文化の根源を守り、同一文化の伝統を受けついできた。朝代がいくら変わっても、この文化の伝統は変わらなかったし、異民族がいくら侵入しても、最後にはみな中華民族の大家庭の中に融合していった。中華民族は大海原のように広大な胸懷をもって、数千年に亘る歴史の大河の中で吸収と吐出をくりかえし、悠久で輝かしい中華文明をみごとに築き上げたのだ。

中華文明の伝統の長さや範囲の広さ深さについては、今日まで伝わる莫大な数量と多種多様に亘る古文明の遺跡、遺物がそれをよく物語る。その内容は、人類の物質文化のすべての領域を殆んどカバーしている。ここでは、中国の文物を大きく二つに分類してみる。一つは移動できない文物。それは主に古遺跡、古建築、古墓葬、石窟寺など、地上と地下の古い遺跡を指す。もう一つは移動可能な文物で、石器、陶器、玉器、銅器、石彫、陶

俑、仏教塑像、金銀細工、磁器、漆器、竹木牙角器、家具、書画、古文獻などの古器物を指す。本書では後者の古器物を主体に紹介するが、前者の内容にも一部言及する。

早くも11世紀の北宋時代、中国では一部の文人、士大夫が古器物の研究を始めている。主として文字を刻んだ青銅器や石碑の銘の研究で、従って“金石学”といわれた。のちに人びとは研究の対象をさらに広げ、“古器物”又は“古物”と呼んだ。明、清の時代になってからは、“古董”、“骨董”、“古玩”の名称が現われた。20世紀の50年代以降になって、しだいに“文物”で統一されるようになった。

この半世紀に、中国大陸の野外における考古学的調査と発掘の仕事は、間断なく進められてきた。とりわけ過去の20余年間、国内経済のすみやかな発展につれ、各地の建築、土木工事が広範に行なわれる中で、地中深く埋もれていた文物の宝庫が開かれるに至った。また考古学的技術や方法も絶えず高まり、人びとに驚きと喜びをもたらす考古学上の新たな発見も相継いだ。

本書は中国の文物を分類して解説する。彩陶、美玉、青銅器、俑と塑像、陵墓石刻、墓室壁画、石窟寺と仏教の造型芸術、金銀細工、磁器、家具類、漆器、工芸品など十二類に大別し、それぞれ各類の文物の起源と発展についての大きな沿革を紹介した。なかんずく各類文物が発展し成熟し全盛期を迎えた時期の作品にポイントを置いた。

ここで紹介する文物以外にも、中国五千年の文明が生み出した豊富な物質遺産のなかには、金属貨幣や古籍版本、書画芸術など、人びとの鑑賞と研究に値するものは数多い。しかし、本書の限られたスペースで語りつくすのはとうてい不可能であろう。もし中国のあらゆる文物について、全面かつ詳細な解説をおこなおうとすれば、それはとてつもないプロジェクトになってしまう。本書では力の及ぶ範囲での探究を試みた。読者の皆さんに、中国文物への理解を深めていただくためのよすがとなれば幸いである。



1

彩 陶

- ◇ 陶芸の発生
- ◇ 彩陶の発展
- ◇ 仰韶の彩陶文飾：赤地に黒彩
- ◇ 仰韶彩陶のモチーフ（一）——魚、鳥、蛙
- ◇ 仰韶彩陶のモチーフ（二）——バラの花
- ◇ 仰韶彩陶のモチーフ（三）——巫術とトータルム
- ◇ その他の史前文化の彩陶

陶器は中国文物のうち最初に出現した文物で、一大類別をなす。考古学的資料によると、中国での陶器の出現は約1万年前とされる。江西省万年の仙人洞で出土した複原陶罐は、これまで発見されたもののうち、中国最古の完全複原可能な陶器である。

陶芸の発生

人類の幼年時代は、我われの子供の頃と同様、最初の創意性は、自らを育んでくれるその土地から得る。陶器もそのようにして生まれた。土に水を加えてこね、長い棒や輪をつくり、それをぐるぐる巻き重ね円筒形にし、さらに丸い皿をつくって底につける。その上でそれをいじりながら胴部を外側へそらせ、上部を小さく絞り、唇部をつくると、ねんどの坯がややでき上げる。つぎに湿って軟かい罐坯を風通しのよい木陰に移し、生乾きになったところで表面をなめらかに磨き、柴草の中で焼き上げる。さいごに火中から取り出せば、陶罐の出来上がりというわけだ。

初期のものは外形も粗雑で、形状も不揃い、色合いも火加減のむらで濃度がまちまちだ。だがそれは、各民族の先人たちが無数の世代にわたって経験をつみ重ね、数百年の長い歳月をへてつくりあげたものである。

陶器造りの発明以前、人類が造る道具類や装飾品は、ただ天然の物質の形状を変えるだけにとど



龍山文化の白陶罐、山東省濰坊の出土品。

まった。たとえば石を割って石片にし、それを磨いて特定の形状をもつ工具をつくったり、あるいは獣牙や貝殻に穴をあけ、ひもを通して首飾りにするなど。これは物質の外形を変えても、材質そのものは変わらない。だが陶器の焼成は全く異なり、一つの物質を他の物質に造り変える創造的な活動であり、人類が自分の考えと働きで天然物の材質を造り変える活動の开端であった。

残念ながら、陶器の発明過程や生産の確実な年代については、学者間での意見が今だにまとまっていない。大方の推測としては、ねんどのついたカゴが火のそばにおかれ、それが焼けて硬化し、水の漏れにくい容器となった。原始人はそこからヒントをえて、陶器を造るようになったといわれる。そして実験と改良を重ね、人類はついに陶器の製造技術を身につけた。つまり水でこねたねんどを成型し、乾燥後に火中で焼成することにより、硬質で水の漏れにくい陶器ができたのである。

彩陶の発展

原始陶器の初期の頃、人類は陶器の実用性のみにとらわれ、装飾や美しさを考える余裕がなかったのか、ごく少数の陶鉢の口の外べりに簡単な赤の帯文が見えるだけである。

原始農業の発展で物質生活が豊かになるにつれ、人類はより多くの精力を、陶器づくりに注ぐ



仰韶文化の人頭形器口彩陶瓶。約5600年前のもので、甘肅省秦安の大地湾で出土した。

ようになる。そして実用性の外に、美への追求を示し、満たすようになる。原始陶芸はこのへんから大きく前進し、更に高度の域——彩陶へと発展をとげる。彩陶は史前文物のうち、実用と美とが結合した最初の作品である。

約7000年から5000年前、新石器時代の中期から末期にかけて、彩陶は全盛時代に入る。最も代表的な出土地域は大体において黄河上流、中流に位する甘肅、陝西などだ。そこの彩陶の多くが、当時の人びとが日常生活で使う実用器皿で、盆、罐、壺などの容れ物や、鉢、碗などの食器類があり、その表面には彩色文飾や動物などが、簡けつに描かれている。

史前期の人類は地面に坐りこんで生活していたため、高足の家具類は一切なく、日用の器皿はみな地面に置かれた。そのため彩陶にほどこす装飾や文様は、地面に坐る人によく見える位置に配置された。鉢や碗のばあい、口から以下の外側の上部に文様がつき、一部には内側の碗心までつくものもある。曲腹盆のばあい、口から下、曲腹から上の外壁と口の沿に文様が着き、曲腹から下の内側にしぼられた外壁は、ふつう無地のままが多い。これは坐る人の目につかない部分だからであろう。口を大きく開いた盆のばあい、その外壁は見えにくいため、文様は内側の上部につく。罐の文帯はほとんどがその肩部か上腹の外壁につく。小型の葫蘆瓶は、外側ぜんたいに彩色文様がついている。



仰韶文化の猪面文細頸彩陶壺。BC4500～BC3000年頃の物と推定される。

仰韶の彩陶文飾：赤地に黒彩

中国で有史以前の彩陶のうち、最も代表的なのは仰韶文化の彩陶であろう。



大汶口文化の彩陶鉢。BC4500～BC2500年頃の物と推定される。江蘇省邳県で出土。

1921年、中原地区の母系氏族社会時代の高度の文明を代表する原始村落の遺跡が、河南省渑池の仰韶村で、考古学者の手で発掘された。考古学界の慣例により、この新石器時代の文化遺跡は、仰韶文化と命名された。ここでは研磨された精緻な石器が多数出土した他、考古学者は日用の陶器を大量に発見した。陶器の造りは精緻をきわめ、使用されるねんどはすべて淘洗されているため、胎質はきめが細かく、窯で焼き上げたあとは一般に橙紅色を呈する。材質は細泥紅陶と夾砂紅褐陶の二種類に分けられる。花文は黒彩が主で、紅彩は少なく、地の色は陶器自体の橙紅色がふつうだが、なかには土台の上に白か紅色で上塗りしてから彩絵を施して焼き上げ、花文の色彩をきわだたせたものもある。

科学的な測定の結果、仰韶文化の年代は約BC5000～BC3000年とされる。そのあと、中原地区のいたるところで、これに類似した遺跡が続々と発見された。それらの存続年代は互いに近似し、文化遺産も酷似している



馬家窯文化の彩陶罐。BC3300～BC2900年頃の物と推定される。甘粛省の臨洮で出土。

ところから、仰韶文化が母系氏族共同体時代の中原文化の代名詞となった。その分布地域は、甘粛、陝西、河南を中心に、河北、内蒙古、山西、青海、ひいては湖南省のいちぶにも及ぶ。

仰韶彩陶のモチーフ（一）—— 魚、鳥、蛙

1957年、河南省三峽市の廟底溝で、仰韶文化と、仰韶文化から竜山文化への移行型の遺跡が発見された。考古学界ではこれを、仰韶文化廟底溝類型と名づけた。科学的な測定の結果、廟底溝タイプの彩陶の年代は、BC3900年前後とされる。このタイプの彩陶は動物の形をテーマとした図案が多く、いろんな形の飛鳥や簡略化された鳥文、写実的な蛙文を含む。

この廟底溝タイプよりやや早期の仰韶文化半坡タイプの彩陶図案は、いろんな形の魚や簡略化された魚文がその特色で、ときには魚網を示す図案を配する。また青蛙の絵も生きいきと描かれ、泳ぐ魚とともに陶盆の内壁をリズムカルに彩る。走獣については、陶盆の内壁に描かれた子鹿だけだ。

仰韶彩陶のモチーフ（二）——バラの花

仰韶彩陶の文様中、最も注目されるのは、陝西省西華村付近の廟底溝タイプ彩陶だ。その多くが多方連続の美しい図案をなしている。絵付けの方

法は、器の本体に文様付けの位置を定め、丸い点を並べて位置ぎめをしたのち、線か弧形の三角文でその円点をつないでゆく。こうして、バランスのとれた、リズムカルな連続文様を生きいきと描いたのだ。つぶさに観察してみると、それは陰陽文様の配合という技法で、バラの花の丸味をおびた花やつばみ、葉、茎などを表現している。

仰韶文化は、その地域や時代のちがいで、多くの類型をもつため、彩陶文様のモチーフや図案もそれぞれ異なる。が、ローズにちなむ図案は、ほとんどのタイプの仰韶彩陶中に見られるため、そこに脈打つ内在的なつながりが感じられる。

仰韶彩陶のモチーフ（三）——巫術とトーテム

1954年に発見された西安の半坡遺跡は、仰韶文化への重要な補足となった。それはBC4800年以前からBC4200年までの原始村落の完全な遺跡であった。半坡タイプの彩陶中には、動物や人面、魚、鹿などの文様が見え、なかには、原始宗教の巫術と密接な関係をもつものもある。例えば、陶壺の両側を尖った角状にせり上げ、壺の本体に魚網の図案を描くのは、頭尾のせり上がった原始時代の丸木舟が水面にたゆたいながら網を打つさまを模したもので、漁獲への願望を示し、これは原始宗教の巫術につながる。また、神秘的な人面の図案があり、その確実な意味あいには、今だに定かでない。丸顔で、鼻すじが通り、目が細かく、頭に三角形の高い帽子をかぶり、口の左右両側にふつう魚を一匹ずつくわえ、あるものはひたいの両がわにそれぞれ小魚を一匹ずつさしている。これは大漁を祈る巫師の銜魚作法とみる学者もいる。

他に、天象を描いた図案もあるが、これは原始農業の生産に関連し、史前人類の天文学に対するおぼろげな意識を示す。また、光り輝く太陽と三日月を描きこむなど、写実的な表現をとるものもあるが、多くの場合、象徴的な手法をとっており、鳥と蛙で太陽と月を表わす。これは、鳥が太陽



馬家窯文化の彩陶盆。BC3000～BC2000年頃の物と推定される。

の精、蛙が月の精とみなされたためだ。今から7000年前に、すでに鳥と蛙は彩陶の文様に現われる。早期の鳥と蛙はかなり写実的で、とくに蛙の文様は、大きな腹に首をちじめ、丸い斑点だらけの背中をみせて這うさまは愛らしい。のちに鳥と蛙の形象はしだいに図案化、神秘化されてゆく。この鳥と蛙のテーマは彩陶文様中に3000年余り続くが、その後は太陽を示す鳥が金色の鴉に、月を示す蛙が三足のがま蛙に変わってゆく。そのため、中国の文人の詩や文中に見える“金鳥”、“蟾蜍”というのは、太陽と月を指すことが多い。

彩陶芸術中の鳥と魚の図案は、もしかすると氏族のトーテムと見なされたのかもしれない。氏族がちがうとトーテム崇拜の元祖もちがってくる。また氏族間の闘いや連盟が、芸術品の表現中に、異なる動物間の闘いや結合の形で表現される。河南省臨汝県で、成人の死者を葬る大型の彩絵陶缸が出土しているが、その外壁に怪奇な絵が描かれていることから、その絵の内容にちなみ《鸛魚石斧図》と名付けられた。絵は高さ37cm、展開幅44cmで、これまでに発見された中国史前陶器上の絵付けでは最大のものである。画面の左手には大きな白サギが胸をはり、首をのばし、高々と頭を上げ、丸い目を見張り、長い口ばしに一尾の魚をくわえている。魚はあがく力もなく、こわばった体を垂直にたらす。白サギの右側には大きな石



曇石山文化の彩陶杯。BC3000～BC2000年頃の物と推定される。福建省の閩侯で出土した。



仰韶文化の彩陶船形壺。BC4800～BC4300年頃の物と推定される。陝西省の宝鸡で出土。

斧が立ててあり、その柄には、織物か縄らしきものが巻かれ、X形の符号がついている。これはおそらく、その氏族首領の権威とパワーのシンボルかと思われる。絵の彩色は鮮明だ。鳥は白ぬりで、りんかくの線描がなく、目が黒で描かれ、生きている。口にくわえる魚は粗い墨線で型どり、斧の外郭も黒墨の線描で、強烈なコントラストをなす。これから見ても、史前のアーティストたちは、画面のムードづくりのため、すでに異なる筆法を使い分けていたことが知れる。



仰韶文化の人面含双魚文彩陶盆。BC4800～BC4300年頃の物と推定される。陝西省西安の半坡遺跡で出土。

その他の史前文化の彩陶

仰韶文化と同時期か、それよりやや後の他の史前文化の遺跡でも、たえず彩陶が発見されている。例えば、東北地区の紅山文化、山東地区の大汶口文化、西北地区の馬家窯文化、さらに遅れて齊家文化、辛店文化、南方の大溪文化、屈家嶺文化、東南沿海地区の曇石山文化、ひいては新疆やチベットの史前文化遺跡のいちぶにも彩陶が出土している。大陸以外の台湾島に分布する史前文化遺跡、例えば、台北の大坌坑と円山、高雄の鳳鼻頭などの遺跡からも、少量の

彩陶が発掘されている。これは台湾海峡兩岸の各原始氏族部落間が密接な連けいを持っていたことを物語る歴史的な証拠である。異なる地区と時代